

## 京都モノ銘品がたり—⑨

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかかれた物語をご紹介します。



帯締の三部紐として使える真田紐は色柄が豊富。帯締、羽織紐は受注製作で相談しながらの対面販売が多い。

# 京の組紐

「組紐」と聞いてまず思い浮かぶのは、和装の紐だろうか。あるいは木箱にかかる真田紐。私たちが気づいていないだけで、紐はさまざまなところに使われているが、これは古来より日本の文化、風習と共に歩んできたといえる。

紐の歴史は古い。古墳時代の埴輪にも見られた紐は、奈良時代には被服、仏具・神具に用いられ、平安時代では貴族たちの束帯や刀剣を帯びるための唐組平緒など華やかなものに取り入れられた。鎌倉時代には丈夫な武具に、室町時代には茶道具の装飾へ、そして江戸時代以降は庶民にも浸透した。

紐は構成方法によって大きく3つに分類される。鳥居にかかるしめ縄に代表される、糸の束を撚り合わせた「撚紐」。縦糸と横糸を直角交差に織り、ほとんど伸縮性がない「織紐」は、ギュッと締めて持ち運ぶのに適しており、真田紐がこれにあたる。そして、糸を斜めに交差させて組んだ伸縮性のある「組紐」だ。強からず弱からず、着けた人に合わせて伸縮する

組紐は着物の帯締、さげ袋の紐、茶道具を包む仕覆と呼ばれる袋物の締緒などにも用いられている。和装や茶道具など、京都では身近なものばかりで、受注製作も多い。受注製作は、茶道関係、香道、能楽といった伝統文化に関するものから帯締や被布飾りなどの和装、印籠や瓢箪、根付など新・古美術、骨董品など多岐にわたる。茶道でいうと、先述の仕覆の締緒、茶壺や振出などにかける七宝網、壺飾り紐などがあり、流派それぞれの“お家元好み”というものも存在する。

### ギュッと締まる帯締は心も引き締める

帯締とは文字通り帯を締める、留めるもので、その締まり加減、伸縮性が非常に重要。着物の中心を成すのが帯、その帯をきちんと留める帯締は背筋を伸ばし心をも締める……勝負服ならぬ“勝負紐”であり、職人の卓越した技を要する。

帯締は、絹糸を染屋さんで染めてもらうところから始まる。紐を操り杵にとった糸は、帯締の仕上が



遠心力を利用しながらの「組み」工程。結びをつくったり、房をつけたり処理を施して仕上げる。この帯締で1本16,800円。



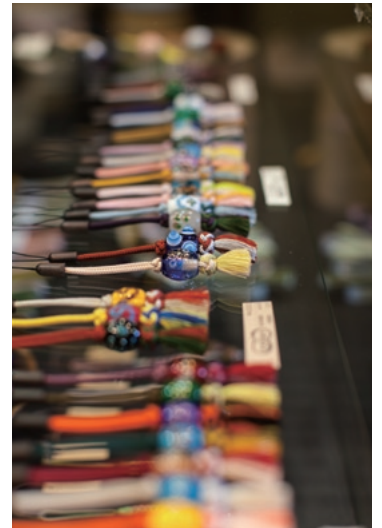
色あざやかな真田紐が並ぶ姿は圧巻。



組み玉の重さは匁で量られており、四つ打ちの帯締であれば1つ120匁の玉が用いられる。



計尺は慎重に数を数えながら行なわれる。四つ打ちの帯締では140本の束を4つつくる。



とんぼ玉の携帯電話ストラップは、好みのとんぼ玉と紐2色を選んでつくってもらうことも可能。

り5尺3寸に合わせて長さが計られる(計尺<sup>へびく</sup>)。糸は実際には組むと締まって短くなるため、準備するのは10.5尺の束を四つ打ちなら4つ。糸の引きつり、遅れ、余りなどは指で糸を弾きながら整え、ようやく組み台の作業へと移る。時間を要するここまでの緻密な工程が出来映えを左右し、長年の経験がものを言う。

組む前のもう1つ大事な作業が、糸を組み玉につける玉づけである。組み玉の重さを変えることで、締まり具合を調節する玉づけは、単なる重石ではなく、組むときに遠心力を生み出す役割がある。玉づけされた糸は組み台にセットされ、職人の手によって組まれていく。「コンコン」と小気味よく台と玉が当たり、遠心力を利用しながら均一な力で組み始めると、見る見るうちに組みあがっていく。

### 組紐のすばらしさに触れる

「紐屋の仕事は幅広い」と語る、伊藤組紐店の六代

目伊藤正文さん。茶道お家元好みの真田紐もあれば、能面の紐、杖の紐、掛け軸の紐、めがねストラップまで要望があればどんな紐でも手がける。店内を見渡せば、とんぼ玉のストラップ、組紐ネクストラップなど組紐小物が並んでいるが、これは観光客向け。本分は伝統、文化に寄り添うもの。そこに軸足を置くが現実には厳しい。「私たちががんばっていても染屋さんが店をたたまれたり……」。多くの伝統産業にいえることだが、昔からの仕入れ先、外注先があって成り立っているものは、どれが欠けても伝統、文化の継承は難しい。

組紐の根付やストラップは伝統技術に触れるにはもってこいだ。これをきっかけに組紐の色彩や柄の妙、繊細な技術に裏打ちされた美しさに魅了され、“本物”へと開眼してほしい——これが、組紐に携わる職人たちの願いであろう。

(取材協力：伊藤組紐店 <http://itokumihimoten.com>)